
最強美少女と最強男子

幻想殺し・超電磁砲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強美少女と最強男子

【Nコード】

N6352W

【作者名】

幻想殺し・超電磁砲

【あらすじ】

男嫌いの美少女、斎藤美咲は才色兼備の文武両道と何事にも無関心なイケメン男子、黒田拓海はあらゆる能力面で完全無欠の完璧男。この最強すぎる2人の常識離れな生活のお話。

登場人物

さいとう みさき
斎藤 美咲

年齢：15歳

誕生日：9月29日

血液型：O型

身長：162cm

体重：48kg

スリーサイズ：B84cm（Dカップ）/W55cm/H80cm

特技：柔道（三段）、空手（三段）、合気道、スポーツ全般、料理、家事全般

好きなこと・もの：家族、親友

容姿

クールな雰囲気とおしとやかさを持つ黒髪の美少女。

髪は肩下15cmほどの長さの綺麗でサラサラしたストレート。

化粧を全くいらぬほど整った美形の顔立ち。

高校生とは思えないほどの抜群のスタイル。

性格

表情豊かで家族・親友思いで優しく、面倒見も良い。

基本的に冷静で要領が良く落ち着いていて、素直で自分の間違いは言い訳せず認める。

容姿とは裏腹に男勝りで口調も男っぽいところがある。

その他

本編の主人公。

才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

頭脳明晰、成績トップで入学試験は全教科満点で首席合格。

頭がよく切れ、勘が鋭く、有らぬことに敏感。

容姿端麗で本来ならモテるが完璧すぎて男を誰一人寄り付かせない。

恋愛に関しては別で他人のことには敏感だが、自分の事に関しては以外に鈍感でツンデレ。

男嫌いで怒らせると男子もビビらせるほど怖く、特に堪忍袋の緒が切れた時は途轍もない殺気とオーラが発するため、別名『魔神』または『鬼神』と呼ばれている。

鉄やコンクリート、岩などをいとも簡単に破壊することができる破壊力。

破壊力以外の身体能力も女子離れ（人間離れ）している。

どんな気配でも察知することができ、誰も背後に取ることができない。

美奈と美琴と美帆とは同じ中学で親友。

中学時代、柔道部と空手部を掛け持ちしていて両方の主将だった。全国中学校柔道大会団体戦と個人戦（48kg級、52kg級）と全日本ジュニア柔道体重別選手権大会3連覇（48kg級、52kg級）と世界ジュニア柔道選手権大会（48kg級、52kg級）と世界ジュニア柔道選手権大会で2連覇（48kg級）、世界柔道選手権大会優勝（52kg級）、52kg級ながら全日本柔道選手権大会で優勝までしていて、公式戦や練習試合、国際大会全て全戦全勝。

父親はすでに亡くなっていて、母の美幸が仕事で普段いないため、小学生の時から家事をしている。

少し広めのマンション（10階建て）に住んでいる。

黒田 くろだ 拓海 たくみ

年齢：15歳

誕生日：4月3日

血液型：O型

身長：180cm

体重：70kg

特技：剣道（三段）、柔道（三段）、空手（三段）、スポーツ全

般、料理、家事全般

好きなこと・もの：観察

容姿

かなりの美形で誰もが認めるクールなイケメン（coolを通り越してcoldに近い）。

色素の薄い金髪。

エメラルドグリーンの瞳。

細身だが筋肉質でバランスが取れている体格。

性格

寡黙で無駄なことは基本的にしない。

沈着冷静で自分に関係ないことには、基本的に無頓着。

ポーカーフエイス。

その他

本編のもう1人の主人公。

眉目秀麗、頭脳明晰でスポーツ万能の文武両道。

何事にも要領が良い完璧男。

身体能力が人間離れしている。

どんな気配でも察知することができ、どんな時でも全く隙がなく誰も背後に取ることができない。

成績トップで内部進学試験は全教科満点で首席合格。

父親は世界指折の大企業であるKURODAグループ総帥、黒田商事のCEO。

両親は現在アメリカにいる。

全国中学校柔道大会（66kg級、73kg級）と全日本ジュニア柔道体重別選手権大会（66kg級、73kg級）3連覇、近代柔道杯全国中学生柔道大会と全日本選抜柔道体重別選手権大会（66kg級、73kg級）と世界ジュニア柔道選手権大会（66kg級、73kg級）で2連覇、世界柔道選手権大会優勝（73kg級）、73kg級ながら全日本柔道選手権大会で優勝している。

祐輔と雅樹と俊とは親友。

自宅は超豪邸ではなく、KURODAグループの不動産会社、黒田不動産が管理する超高層マンション（58階建て）の最上階フロア（9LDK）に住んでいる。

さいとう みずす
斎藤 美鈴

年齢：14歳

誕生日：12月18日

血液型：O型

身長：155cm

体重：42kg

スリーサイズ：B80cm（Cカップ）/W52cm/H77cm

特技：バスケット、柔道、合気道、スポーツ全般、家事

好きなこと・もの：家族、バスケット

容姿

美咲にそっくり。

髪はサラサラで長さは美咲と同じ。

中学生とは思えないくらい抜群のスタイル。

性格

美咲と同じく、表情豊かで家族・親友思いで優しく、面倒見も良い。

素直で基本的に冷静で要領が良く落ち着いている。

その他

美咲の妹。

姉の美咲と同じく才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

身体能力が女子中学生離れしている。

女子バスケット部の部長でキャプテン。

小さいころから護身用に柔道と合気道を習っていた。

不審な気配を察知することができ、基本的に隙がなく不審者が背後に取ることができない。

さいとう みつき
齋藤 美月

年齢：12歳

誕生日：2月24日

血液型：A型

身長：151cm

体重：40kg

スリーサイズ：B78cm（Cカップ）/W50cm/H75cm

特技：バレーボール、空手、合気道、スポーツ全般、家事

好きなこと・もの：家族、バレーボール

容姿

美咲と美鈴にそっくり。

髪はサラサラで長さは美咲と同じ。

中学生とは思えないくらい抜群のスタイル。

性格

美咲と同じく、表情豊かで家族・親友思いで優しく、面倒見も良
い。

素直で基本的に冷静で要領が良く落ち着いている。

その他

美春と双子。

美咲と美鈴の妹。

姉の美咲や美鈴と同じく才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

身体能力が女子中学生離れている。

バレー部所属。

小さいころから護身用に空手と合気道を習っていた。

不審な気配を察知することができ、基本的に隙がなく不審者が背
後に取ることができない。

さいとう みはる
齋藤 美春

年齢：12歳

誕生日：2月24日

血液型：A型

身長：151cm

体重：40kg

スリーサイズ：B78cm（Cカップ）/W50cm/H75cm

特技：バレーボール、空手、合気道、スポーツ全般、家事

好きなこと・もの：家族、バレーボール

容姿

美咲と美鈴にそっくり。

髪はサラサラで長さは美咲と同じ。

中学生とは思えないくらい抜群のスタイル。

性格

美咲と同じく、表情豊かで家族・親友思いで優しく、面倒見も良い。

素直で基本的に冷静で要領が良く落ち着いている。

その他

美月と双子。

美咲と美鈴の妹。

姉の美咲や美鈴と同じく才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

身体能力が女子中学生離れしている。

バレー部所属。

小さいころから護身用に空手と合気道を習っていた。

不審な気配を察知することができ、基本的に隙がなく不審者が背後に取ることができない。

さいとう

斎藤

みゆき

美幸

年齢：35歳

誕生日：11月22日

血液型：O型

身長：169cm

体重：49kg

スリーサイズ：B 95 c m（Fカップ）/ W 58 c m / H 90 c m
特技：家事、合気道（三段）、バスケ、バレーボール
好きなこと・もの：娘、亡くなった夫

容姿

20代と間違われるほどの美人で、ときどきナンパされることがある。

サラサラした綺麗な黒髪を後ろで纏めている。

化粧がいらないくらい顔が整っていて肌がきれい。

性格

おしとやかで優しく、おおらか。

その他

美咲たちの母。

電機メーカーの開発企画部企画課課長。

どんな気配でも察知することができ、全く隙がなく誰も背後に取ることができない。

多数の資格を取得している。

公認会計士

秘書技能検定試験準1級、コンピュータ会計能力検定1級、日商簿記検定1級、実用数学技能検定準1級、情報検定1級、TOEIC 920点

ITパスポート試験、基本情報技術者試験、応用情報技術者試験
テクニカルエンジニア試験、システム監査技術者試験、ITストラテジスト試験、プロジェクトマネージャ試験、システムアーキテクト試験、ITサービスマネージャ試験

ネットワークスペシャリスト試験、データベーススペシャリスト試験、エンベデッドシステムスペシャリスト試験、情報セキュリティスペシャリスト試験

CGエンジニア検定（CGクリエイター検定1級、Webデザイン検定1級、CGエンジニア検定1級、画像処理エンジニア検定1級、マルチメディア検定2級）

美島 みしま 美奈 みな

年齢：15歳

誕生日：9月8日

血液型：AB型

身長：165cm

体重：48kg

スリーサイズ：B82cm（Dカップ）/W58cm/H81cm

特技：空手、スポーツ全般、サッカー

好きなこと・もの：親友、家族

容姿

化粧を全くいらないほど整った美形の顔立ち。

髪はサラサラの金髪のアトレート。

長さは腰あたりまでである。

普段は耳の部分の髪を後ろで結んでいて、運動時はポニーテールをしている。

美咲と同じでスタイル抜群。

性格

親友思いで優しく正義感が強い。

いじめが大嫌い。

その他

美咲と美琴と美帆とは親友。

才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

頭脳明晰、成績トップクラス。

中学時代は女子テニス部で全中選手権で3連覇。

母親がクォーター。

父親はサッカー選手。

母親は元テニス選手。

自宅はスポーツ選手の家だけあってかなりの豪邸。

かみじょう みこと
上条 美琴

年齢：15歳

誕生日：8月21日

血液型：O型

身長：161cm

体重：49kg

スリーサイズ：B80cm（Cカップ）/W56cm/H78cm

特技：空手、スポーツ全般、射撃、料理、バイオリン

好きなこと・もの：親友、家族

容姿

化粧を全くいらぬほど整った美形の顔立ち。

髪はサラサラの茶髪のストレートで肩あたりまでの長さでヘアピンを付けている。

美咲と美奈と同じでスタイル抜群。

性格

快活で礼儀正しい。

誰にでも優しく（優し過ぎる）、物凄い善人。

少女趣味なところがあり、特に『ウサギ』と『カエル』と『ネコ』のキャラクターに執着している。

その他

才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

頭脳明晰、成績トップクラス。

美咲と美奈と美帆とは親友。

中学時代、陸上短距離選手で全中選手権3連覇。

父親は大手スポーツメーカー社長。

母親は元日本代表の水泳選手。

実はお嬢様で自宅は豪邸。

きたむら みほ
北村 美帆

年齢：15歳

誕生日：6月22日

血液型：B型

身長：170cm

体重：52kg

スリーサイズ：B88cm（Dカップ）/W58cm/H88cm

特技：柔道、スポーツ全般、料理

好きなこと・もの：親友

容姿

超天然の美少女。

化粧を全くいらぬほど整った美形の顔立ち。

美咲と美奈と美琴と同じでスタイル抜群。

腰あたりまでの長さのサラサラの茶髪ストレート。

学校では耳の部分の髪を後ろで結んでいるが、学校以外では色々なヘアースタイルにしている。

性格

超天然。

人懐っこく、基本的に誰にでも優しい。

その他

才色兼備でスポーツ万能の文武両道。

頭脳明晰、成績トップクラス。

美咲と美奈と美琴とは親友。

中学時代女子バスケット部の部長を務め、チームを全国制覇させている。

大手外食産業すかいほーくグループ総帥の令嬢。

本物のお嬢様だけあって自宅は大豪邸。

高橋 祐輔
たかはし ゆうすけ

年齢：15歳

誕生日：10月5日

血液型：A型

身長：178cm

体重：73kg

特技：剣道、柔道、空手、スポーツ全般

好きなこと・もの：親友、仲間

容姿

女子からモテまくる超イケメン。

細身だが筋肉質でバランスが取れている体格。

黒のサラサラした短髪。

性格

沈着冷静。

その他

伸洋と雅樹と俊とは親友。

眉目秀麗、頭脳明晰でスポーツ万能の文武両道。

中学時代は野球部で4番を務め、チームを全国制覇させている。

高橋製薬社長の令息。

自宅は超豪邸。

椎名 雅樹 しいな まさき

年齢：15歳

誕生日：7月3日

血液型：B型

身長：183cm

体重：66kg

特技：スポーツ全般

好きなこと・もの：スポーツ

容姿

誰もが認める超イケメン。

細身だが筋肉質でバランスが取れている体格。

茶色の短髪。

性格

真面目だが超目立ちたがり屋でアホ。

その他

眉目秀麗、頭脳明晰でスポーツ万能の文武両道。

伸洋と祐輔と俊とは親友。

中学時代男子バスケット部の部長を務め、チームを全国制覇させている。

父親はハリウッドのアクションスター。

母親は元ハリウッド女優。

自宅はハリウッドスターの家だけあってかなりの豪邸。

おおさし しゅん
大迫 俊

年齢：15歳

誕生日：11月10日

血液型：AB型

身長：174cm

体重：69kg

特技：サッカー、空手、スポーツ全般

好きなこと・もの：サッカー、親友

容姿

優しい系のイケメン。

細身だが筋肉質でバランスが取れている体格。

黒のツンツンはねた短髪。

性格

おおらかで優しい。

その他

眉目秀麗、頭脳明晰でスポーツ万能の文武両道。

伸洋と祐輔と雅樹とは親友。

中学時代はサッカー部のエースで全国制覇させている。

父親は大手自動車メーカーの副社長。

自宅は豪邸まではいかないがかなり広い家。

プロローグ

「部外者は引っ込んでいろ！」

1人の男がそう叫んだ。

男の前には1人の美少女と1人の女性が立っている。その美少女は男をものすごい形相で睨んでいて、女性は震えながら美少女の後ろに隠れている。

美少女が口を開いた。

「黙れ！ この最低男！ この人をお前みたいな男に付き合わせるわけにはいかない！ このDV男！ お前がやったことは暴力だ！ お前は警察行きだ、この犯罪者！」

「なんだと！（怒）」

男は美少女の言葉に我慢できなくなり、足もとに転がっていた鉄パイプを拾い上げて美少女に向かって走り出した。

「黙れこの尼！」

ところが、その美少女はその場から逃げようとせず、男から目を離さない。

そして、男が美少女の目の前まで来て、鉄パイプ振り下ろした。その瞬間、美少女は男が振り下ろした鉄パイプに向けて左足の上段回し蹴りで放つ。左足は鉄パイプを捕まえ、鉄パイプは真つ二つにへし折り、左足下さずそのまま男へ後ろ蹴りを放った。美少女の蹴りのスピードが尋常じゃなく速く、男は正面から全速力で走り込んできたので避けることもできずに直撃した。

「ウエッ」

後ろに飛んだ男は懷から刃渡り20cmほどのサバイバルナイフを取り出した。

「死ねえー！！！」

ナイフで刺そうと美少女に向かって走り出した。今度は、美少女は左足から1歩前に出て男と距離が縮まり、ナイフとの距離が30cmほどになった瞬間、美少女はナイフを避けながら右足を大きく男の懷に踏み込んで男の右腕を掴みながら体を回転させ、男を背負い、そのまま美少女はなんと綺麗な一本背負いで男を投げたのだ。その後、美少女は掴んでいる男の右腕を捻り上げた。

「銃刀法違反だ！ この犯罪者！」

偶然通りかかってその様子を見ていた高校生くらい1人のイケメンは思わずこう言った。

「怖っ……………」

数分して警察が来て男を連行していった。

この男を投げた美少女、名前は斎藤美咲。15歳の中学生、とってもつい先日、中学校を卒業したばかりだ。様子を見ていた高校生くらいイケメンの名前は、黒田拓海。美咲と同じでつい先日中学を卒業したばかりだ。

何度か顔を合わせたことがあるが卒業した中学が違う2人。この2人が再び顔を合わせたとき、歯車が動き出す。

第1話 入学式

4月8日、今日は青城大附属青城高校の入学式。

新しい制服に袖を通した美咲は自室を出て玄関へ向かう。

「もう行くの？」

母の美幸が美咲の姿を見て声をかけた。

現在時刻は7時20分。

「うん。美奈たちと駅で待ち合わせしてるから」

「そう。ごめんね、今日行けなくて……」

「仕方ないよ、仕事忙しいんでしょ。それじゃあ、行ってきます！」

美咲は自宅マンションを出ると駐輪場から自分の自転車を出し、待ち合わせ場所の千歳台駅へ向かった。

千歳台駅に着くと親友の美島美奈と上条美琴と北村美帆が待っていた。

「おはよう！」

「……おはよう！」

改札を通った4人を何人もの男たちが鼻の下を伸ばして見蕩れていた。ついこの前まで中学生だったとは思えないほどのスタイルとルックスの4人だ。見蕩れるな、という方が無理だ。

そんな視線を全く気にもとめず4人は階段を上っていくと、ちょうど乗換駅である新宿行きの急行が来るところだった。青城大附属青城高校は渋谷区広尾にあるため、新宿で山手線に乗り換えないといけない。

電車に乗った4人は新宿駅に着くと、山手線に乗り換え恵比寿駅へ向かった。

恵比寿駅に着き、電車を降りて改札口を出て広尾方面に歩いていくと途轍もなく広い敷地が見えてきた。その敷地が青城大附属青城高校の敷地だ。青城高校の正門を高級車が何台も入っていく。その光景を見て美咲が口を開いた。

「まったく、学校には自転車か電車を使って徒歩で行くものでしょ！ 車で登校なんておかしいわよ！」

「仕方ないよ、ここの生徒の半分近くが上流階級の家柄なんだから」「そうだよ。高校からの入学者は80人しかないんだし」

「その入学者も大半がそれなりにお金がある家だからね」と言つて美咲を宥める3人。

しかし、美咲はすかさず3人に突っ込む。

「そういう美奈たちもお金持ちじゃない」

「「「あはは……」」」

美咲の言葉が事実であるため苦笑いする3人。

「それより早く行こう」

4人は正門を通過して敷地内に入ってしまった。

中を歩いていると昇降口前にクラス表が掲示されていた。美咲たちはそこから自分の名前を探す。すると、4人とも1年1組だった。

「「みんな同じクラスだ！」」

「「よかった！」」

「また3年間よろしく！」

「こちらこそ！」

「よろしく！」

またとは、4人は小学1年生のときから9年間同じクラスだった。そしてこの青城高校はクラス替えが無い。そのため、1年のときのクラスがそのまま持ち上がる。つまり、4人は12年間同じクラスになる事が決まったのだ。

「それじゃあ、早く教室に行こう！」

4人が校舎に入り、階段を上って1年1組の教室に向かう。1組の教室に入り黒板に貼られている座席表を見てそれぞれ自分の席に座る。

少しして教師だと思われる人が1人入ってきた。

「はい、席に着いて！ これから3年間、このクラスの担任になる
ふるかわ よしき
古河良樹だ。よろしく！ それじゃあ、今から出欠を取る」

担任のだった。

「——大迫駿」

「はい」

「——上条美琴」

「はい」

「北村美帆」

「はい」

（美琴と美帆以外の名前は知らない人の名前のはずなのに、どこかで聞いたことのある名字ばかり）

そう思いながら一人一人顔を見ている美咲。残念ながら自分の席の列の人の顔は見えない。

「——黒田拓海」

「はい」

（黒田、拓海。柔道、空手関係で聞いたことがある名前だけど。まさか………ね）

「——斎藤美咲」

「はい」

その後も聞いたことのある名字しかなかった。大半が家柄や親の名前が有名で知っているという理由。中には中学時代に部活動で活躍していた人もいた。

先生は出欠を取り終わると、この後のことを簡単に話した。

時間になり体育館に行き、入学式が行われた。新入生代表は本来、主席合格者がやることになっている。しかし、今回は主席合格者が2人いたが双方とも辞退したため、代わりに次席合格者がやった。

入学式が終わり、教室に戻りHRで配布物が配られ、明日以降の予定を聞き解散となった。

「美咲帰ろう！」

「うん！」

「美琴と美帆も行こう」

「OK」

「この後どこか寄る？」

「どうする？」

いつも通りの会話をしながら学校を出て駅に向かう。

恵比寿駅に着き電車に乗ってどうするか話したが、今日はこのまま帰宅することになり、千歳台駅に着くとみんな帰路に着いた。

第2話 青城大附属成城中最強の4人（前書き）

美咲視点です。

第2話 青城大附属成城中最強の4人

入学式の翌日。

私は昨日と同じ時間に家を出て駅に向かった。駅で美奈たちと待ち合わせると昨日と同じ電車に乗った。

恵比寿駅から学校へ向かっていると擦れ違う人たちがみんなこちらを振り向いてくる。

今日も3人に見蕩れてるばかり。3人とも超美人で可愛いから仕方ないか。

「どうしたの、美咲？」

「いや……また3人のことを見ている人いるなあ。と、思ってたね」

「『男女』とか『鬼』とか『魔神』とか言われてる私には無縁なことでけどね」

「……え！？」「」

「しかも美奈はサッカー日本代表のキャプテンの娘だし、美琴はスポーツメーカー社長の娘だし、美帆はすかいほーくグループ総帥の娘。それに対して私は一般庶民」

（美咲ったら、自分のことにはほんと鈍感だよな！）

（そうそう！ 美咲が一番美人なのに“中の中”としか思っていないもん）

（しかもこう言っているけど、まるで気にしてないしね）

「まあ、どうでもいいっか！」

そう言っただけで私たちは正門を通って校舎に向かった。

私たちが教室に入ると、教室は女子でいっぱいだった。

「何だろ？ この人集りは」

私は美琴に聞くと美帆が答えた。

「多分、例の4人じゃない？」

「例の4人？」

（例の4人って、あの……）

「 青城大附属成城中最強の4人 ”よ」

青城大附属成城中最強の4人とは、青城大附属成城中からの内部進学者である大迫駿と椎名雅樹と高橋祐輔と黒田拓海のことだ。

黒のツンツンはねた短髪の男子が大迫駿。彼はイケメンでかなりモテている。中学時代は、うちの中学である千歳台中サッカー部の全大会の優勝を阻んだ成城中サッカー部のエース。

彼の父親は大手自動車メーカーの副社長。収入はかなりの額だとか。

茶色の短髪の男子が椎名雅樹。彼は大迫と同様にイケメンでモテる。中学時代は、これまた千歳台中野球部の全大会の優勝を阻んだ成城中野球部の4番打者。

彼の父親は有名なハリウッドのアクションスターで、母親はハリウッド女優というなんとも豪華な親だ。そのため、収入が途轍もない額だ。

黒のサラサラした短髪の男子が高橋祐輔。彼も大迫や椎名と同様にイケメンで超モテる。さらにこいつも中学時代、千歳台中男子バスケット部の全大会の優勝を阻んだ成城中男子バスケット部長。

彼の父親は高橋製薬の社長だ。高橋製薬は年商2兆円を超える会社だ。

そして、エメラルドグリーンの瞳で色素の薄い金髪の男子が黒田拓海。こいつも3人と同様にイケメンで超モテる。さらに私と同じで 全国中学校柔道大会と全日本ジュニア柔道体重別選手権大会3連覇、近代柔道杯全国中学生柔道大会と全日本選抜柔道体重別選手権大会と世界ジュニア柔道選手権大会で2連覇、世界柔道選手権大会と全日本柔道選手権大会で優勝までしている。

こいつの父親は黒田グループのCEOだ。黒田グループは世界有数の大企業で年商5兆円を超え、傘下の企業も含めると年商80兆円を超えるらしい。

この4人、頭脳明晰でスポーツ万能の文武両道である上に憎らしいほど超イケメンでお金持ち。モテて当然だが、私はあまり気に入らない。と、いうか好きじゃない。

私たちはこの4人と同じクラスというなんとも不幸なことだ。

第3話 区立千歳台中最強の4人（前書き）

拓海視点です。

第3話 区立千歳台中最強の4人

入学式から1週間が過ぎた。俺と祐輔と雅樹と駿の4人は今日も多くの女子が取り囲んでいる。そこから少し離れたところに4人の女子がいた。彼女たちも他の女子と同じで俺たちのほうを見ているが、その視線はこの取り囲んでいる女子たちと違っている。さらに、4人は一度も俺たちに話しかけてこない。

俺がそっちのほうを見ていると雅樹が話しかけてきた。

「なあ、拓海」

「なんだ？」

「なんで彼女たちは俺のところに来てくれないんだ！」

「そんなもん知るか！」

目立ちたがり屋の雅樹にはいつも呆れる。

「確かに、彼女たちはまだ話しことないね」

「話しかけようとしても、すぐ女子に囲まれちゃって近づけないしね」

取り囲んでいる女子は同じ1年だけでなく2、3年の女子もいるため、10人20人の数じゃない。

いい加減にしてほしいと思い始めたとき、担任の橋本弘哉はしもと ひろきが来た。「もうチャイム鳴ったぞ！ さっさと自分の教室に戻れ！」

この一言で女子たちが戻っていき、全員出て行くとHRが始まった。内容は大した事はなくすぐに終わり1限目の準備をした。1限目は地理ですぐに地理の教師が来て授業が始まった。

一番後ろの席の俺はボーッと教室全体を眺めていると例の4人を見てどうという人間だったか思い出した。

腰あたりまで長さのある茶髪のストレートで耳の部分の髪を後ろ

で結んでいる女子が北村美帆。彼女は化粧を全くいらぬほど整った美形の顔立ち。つまり、美少女だ。しかも顔だけでなくスタイルも超抜群で高校生とは思えないほどだ。頭脳明晰、つまり才色兼備だ。しかもスポーツ万能の文武両道。彼女は中学のときは、女子バスケ部の部長を務めていたらしく、チームを全国制覇させている。という実力を持っている。

彼女の父親は大手外食産業の『すかいほく』グループの総帥だ。すかいほくグループは年商600億円を超える。そんな企業の総帥の娘が公立中学出身とは誰も思わぬよう、ほとんどの生徒が気付いていないようだ。

肩あたりまでの長さの茶髪のアトレートの子が上条美琴。彼女も北村さんと同様で美少女でスタイルも超抜群だ。同様なのは外見だけでなく頭のよく頭脳明晰の才色兼備でスポーツ万能の文武両道。中学のときは、陸上の短距離選手で全中選手権3連覇している。種目は100m、200m、400mだ。

彼女の父親は大手スポーツメーカーの社長で年商3000億円ほど。母親は元日本代表の水泳選手（種目は4泳法全て）。

腰あたりまで長さのある金髪のアトレートで耳の部分の髪を後ろで結んでいる女子が美島美奈。彼女も2人と同様で美少女でスタイルも超抜群で頭脳明晰の才色兼備でスポーツ万能の文武両道。中学のときは、女子テニス部で全中選手権で3連覇している。

彼女の父親はサッカー選手で日本代表のキャプテンだ。母親は日本人で唯一グラントラムを達成したことがある元テニス選手。父親は日本を代表する名選手で世界でも有名なMF。彼を超える選手は未だいない。それだけの選手であるため、契約金や年俸は途轍もない額だ。

最後に、肩下15cmほどの長さの綺麗でサラサラしたストレート

トの女子が斎藤美咲。彼女も3人と同様で美少女でスタイルも超抜群で頭脳明晰の才色兼備でスポーツ万能の文武両道。彼女のことは他の3人と違って少々知っていて、クールな雰囲気とおしとやかさを持つ。

さらに、彼女は入学試験で全教科満点の首席合格だった。俺は内進学者のため、入学試験は受けていない。頭がよく切れ、勘が鋭く、有らゆることに敏感で鉄やコンクリート、岩などをいとも簡単に破壊することができ、破壊力やそれ以外の身体能力も優れていて、どんな気配でも察知することができ、誰も背後に取ることができないように何度か強盗犯や変質者などを捕まえているところを見たことがある。

中学のときは、柔道部と空手部を掛け持ちしていて両方の主将。しかも、俺と同じで 全国中学校柔道大会と全日本ジュニア柔道体重別選手権大会は3連覇、近代柔道杯全国中学生柔道大会と全日本選抜柔道体重別選手権大会と世界ジュニア柔道選手権大会では2連覇、世界柔道選手権大会と全日本柔道選手権大会でも優勝していて、国内の公式戦や練習試合、国際大会全て全戦全勝。と強すぎる女子だ。

彼女の父親はすでに亡くなっているようで、母親は電機メーカーの開発企画部企画課課長だ。

彼女は他の3人と違ってごく普通の一般家庭でこの学校に入学できるとは思えない。おそらく、特待生なのだろう。

彼女たちは『区立千歳台中最強の4人』と、呼ばれている。これらのことを知っているのは俺と祐輔くらいだろう。

これだけの美少女だと普通の高校だけでなくこの学校でもモテるだろう。だが、彼女たちのことを知らない男子が無理に迫るとそいつらは痛い目に遭うだろうな。

第4話 脅威の体力測定

入学式から1週間が過ぎた。みんなそれぞれ部活に入部し始めている。

今日の体育の授業は体力測定だ。種目は握力、上体起こし、長座体前屈、垂直とび、反復横とび、立ち幅とび、ハンドボール投げ、1500m（女子は1000m）、50m走の9種目だ。

2人1組で行うため、美咲たちは美咲と美奈、美琴と美帆で組み、拓海たちは拓海と祐輔、雅樹と駿で組んだ。

まずは体育館で行う種目からやるため、美咲たちは握力から始めた。美咲たちより先にやった女子の1人が言った。

「和美すごい！ 両手とも37kg！」

「大したことないよ」

和美と呼ばれた女子は村越和美。ハンドボール部員で父親が村越建設の社長だ。

美咲たちも握力を測った。

「何kgだった美帆？」

「私は両手とも47kg。美奈は？」

「右が54kgで左が50kg。美琴は？」

「右は46kgで左が43kgだよ。美咲は？」

「左が65kgで、右は……80kg……」

「……凄っ！……」

美奈と美琴と美帆も高校1年の女子としては十分凄いのだが、美咲は飛び抜けて凄い。当然他の女子はもちろん、男子も大騒ぎ。「彼女たち凄すぎる！」とか「あいつらほんとに女子か！？」など言っていた。

一方男子のほうは、駿は右手が73kg左手が70kg、雅樹は右手が84kg左手が82kg、祐輔は右手が90kg左手が86kg、拓海は右手が100kg左手が95kgとこちらも高校1年の握力とは思えない数字だった。

次は上体起こしだ。これまた4人は途轍もない数字で、美奈は37回、美琴は35回、美帆は34回、美咲は40回。

男子の4人も凄い数字で、祐輔は39回、雅樹は38回、駿も38回、拓海は41回。

その次の長座体前屈は8人とも非常に柔らかく、66cmを超えていた。

次は反復横とび。これは美咲以外の3人が同じ記録で70点。美咲はまたもこれ以上の80点だった。男子の4人も同じで拓海以外の3人が75点で拓海は85点。

垂直とびで女子は美琴が82cm、美奈が86cm、美帆が95cm、美咲が115cm。男子は祐輔が84cm、駿が89cm、雅樹が100cm、拓海が125cm。

今度はグラウンドで残りの立ち幅とび、ハンドボール投げ、1500m（女子は1000m）、50m走。
立ち幅とびは美奈が228cm、美帆が231cm、美琴が234cm、美咲が253cm、駿が270cm、祐輔が277cm、雅樹が284cm、拓海が297cm。

ハンドボール投げは美咲以外の3人が30m、美咲が37m、駿

が37m、雅樹が39m、祐輔が43m、拓海が50m。

次は持久走。女子は1000mで先に美奈と美琴が走り、そのあと美咲と美帆が走った。タイムは美琴が3'33"、美帆が3'28"、美奈が3'21"、美咲が3'10"。男子は1500mで先に祐輔と雅樹が走り、拓海と駿があとに走った。記録は祐輔が4'37"、雅樹が4'31"、駿が4'23"、拓海が4'09"。

最後に50m走。美咲が美琴と、美奈が美帆と一緒に走った。当然だが全中選手権短距離走優勝者である美琴は速すぎる。しかし、美咲も劣らず速くタイムは美琴が6'30秒、美咲が6'31秒、美奈が6'67秒、美帆が6'74秒と4人とも6秒台という脅威のタイム。男子は拓海は駿と、祐輔は雅樹と走り、タイムは拓海が5'79秒、駿が5'97秒、祐輔が5'83秒、雅樹が5'99秒というこれまた驚異的なタイムだった。

この記録に男女とも驚いていたが、生徒だけでなく体育教師も驚いていた。当然、この後あちこちの部活の部長がじきじきに勧誘に来たのは言うまでもなかった。

第5話 不運な強盗たち

5月下旬、来週から中間テストが始まるので、みんな勉強している。いつも拓海たちの周りに集まっている女子たちでさえ、勉強している。勿論、美咲たちも勉強している。

「美咲、美奈。今日はどこで勉強する？」

美琴が美咲と美奈に尋ねた。

「ファミレスにしない？ “美帆んところ”のグループの店で」

「美奈！ また、わざと強調して言った！ それ、やめてよ！」

「ごめんごめん」

「それじゃあ、駅前のファミレスにしよう」

ファミレスで勉強することに決まった4人は荷物を持って教室を後にする。

「祐輔！ 駿！ 今日は一緒に勉強しようぜ！ 場所は駅前のファミレスで！」

雅樹が祐輔と駿に声をかけた。

「別にいいけど」

「俺も構わないよ」

「そつだ！ 拓海も一緒にやろうぜ！」

興味無さそうにしていた拓海にも声をかけた。すると、拓海は雅樹に言った。

「うるさい。一人でやれよ」

「ひどっ！」

「まあ、いいじゃないか拓海。一緒に勉強するくらい」

苦笑いしながら拓海を説得する祐輔。拓海は面倒くさそうに溜息をついて承諾した。

美咲たちはファミレスに向かっていたが、銀行の前を通りかかったとき、美咲が言った。

「あー！ 今日お金を下ろさなきゃいけなかった！」

「それじゃあ、先に銀行に寄ろう」

こうして銀行に入った4人。このあと面倒な事件に巻き込まれるとは、思っていなかった。

美咲たちがATMでお金を下ろし終えて銀行を出ようと出口に向かって歩き出した。その瞬間――。

「動くな！！」

「大人しくしろ！！」

なんと5人組の銀行強盗が押し入って来たのだ。背の高い奴が2人、1人は180cmぐらいの背で青のニット帽を被っていて、もう1人は190cmぐらいの背で黒のニット帽を被っている。小柄な奴も2人いて170cmぐらいの背でグレーのニット帽を被っている奴と160cmぐらいの背で茶色のニット帽を被っている奴、最後に160cmぐらいの背の小太りの奴の5人だ。

「金を出せ！」

「早くしろ！」

強盗たちは全員拳銃オートマゲを所持している。美咲たちはすぐに犯人たちと銀行員と客の位置を確認して捕まえるタイミングを待った。

「（私が合図したら、美奈はグレーのニット帽の奴、美琴は茶色のニット帽の奴、美帆は青のニット帽の奴をそれぞれ確保して）」

「（残りの2人は？）」

「（黒のニット帽の奴と小太りの奴は私が捕まえるわ！）」

「（「わかった！）」」

「（くれぐれも拳銃には注意してね！）」

「（ええ。わかってるわ！）」

「（大丈夫！）」

「（心配ないわ！）」

強盗たちの視線が現金のほうに向いた瞬間、美咲が小さく手を振り下ろした。

「（今よ！）」

打ち合わせ通り、美帆は青のニット帽の奴の背後から一気に近づき懐に入ると、拳銃を持っていた右手の手首を左手で思いつきり掴むとすぐさま一本背負いで投げた。思いつきり床に叩きつけたため、こいつは気を失ったようだ。美帆は転がった拳銃を確保し、マガジンを抜き取った。

美琴も茶色のニット帽の奴の背後から一気に近づくと左足で股間を繰り出し、激痛に耐えようとしたところを素早く右足で上段の回し蹴りを放った。こいつも気を失ったので素早く拳銃を確保し、マガジンを抜き取った。

美奈もグレーのニット帽の奴の背後から一気に近づくと左足で股間を繰り出した。すると、こいつは左手で股間を押さえながら振り向いたので、美奈は左足の後ろ回し蹴りで拳銃を蹴り飛ばし、そのまま右足で顔面に上段回し蹴りを放った。当然こいつも気を失ったので拳銃を確保してマガジンを抜き取った。

美咲は小太りの奴の背後から素早く近づき、左手で奴の左肩を掴

むのと同時に右足で奴の左足の膝関節を蹴り体勢を崩し、右手の手刀を奴の首に放った。小太りは気絶したので素早く拳銃を拾いマガジンを抜き、こっちに拳銃を向けようとしている黒のニット帽の奴の顔面を掛けて投げ付けた。拳銃は見事顔面を直撃して背で黒のニット帽の奴は少しよろけた。その間に美咲は奴に接近して拳銃を持っている奴の右手を拳銃ごと内側に思いっきり曲げ、手首を痛めさせると奴の右手を左手で掴んだまま一本背負いで投げ、床に叩きつけた。奴は当然気絶した。美咲は先ほど投げた拳銃とこいつの拳銃と確保した。

2、3分して警察が来た。その場で簡単に事情聴取をしていると誰かが声をかけてきた。

「女子高生が強盗を捕まえたって聞いて、まさかと思ってきてみたら、また美咲ちゃんたちだったのね」

「由香里さん！」

美咲の再従姉、美幸の従姪の由香里だった。

由香里は警視庁刑事部捜査第一課第六強行犯捜査強盗犯捜査第二係の警部補だ。

「「「こんにちは、由香里さん！」」」

「もう4人ともこういうことは危ないからやめなさい！　って、何度も言ってるでしょ」

「「「ごめんなさい」「」」

「でも、捕まえてくれてありがとう！　こいつら、今指名手配中の連続強盗犯なのよ」

この強盗たちは5件の連続強盗をしていて指名手配されていた。

「それじゃあ、4人とも気をつけて帰ってね！」
そう言っ　て由香里は現場を去って行った。

第6話 完全スルー

美咲たちが銀行を出ると見慣れた顔触れがいた。

「……………」

「さすが区立千歳台中学最強の4人だな。それにしても、よく動けるな。」

「相手はピストルを所持していたのに、恐くないのか？」

「女の子なんだからあんな危ないことしちゃダメだよ！」

そこにいたのは、今や『青城の王子』と言っても過言ではない4人。黒田拓海と高橋祐輔と大迫駿と椎名雅樹だった。

「……………」

美咲は無視して歩き出す。そのあとを追うように美奈と美琴と美帆も歩き出した。

無視されるとは思っていなかったなので、拓海を除く3人は呆然とした。拓海はここでも興味無いようで黙っている。

「つて、ちよつとなんで無視するの！？ 待つてよ！」

呆然としていた雅樹が4人を追いかけに行っただので拓海たちも追った。

美咲たちに追いつくと、雅樹は再び話しかけた。

「ねえ、なんで無視するの？」

「……………」

「（出た！ 美咲得意の男スルースキル！）」

「（今日も健在だね）」

「（つて言うか、私たちもスルーしてるけど）」

雅樹の話を完全にスルーする美咲。その様子を見て苦笑いをしながら小声で話す3人。

あまりにも無視されたので、ついに雅樹は強硬手段をとった。その手段とは、なんと美咲に抱き着こうとしたのだ。だが、抱き着こうとした瞬間、美咲が右足で後ろ蹴りを放った。

「ぐはっ！」

軽く蹴ったため、雅樹は少し後ろに飛ばされた。それを見ていた美奈たちは、苦笑するしかなかった。

「（まさか抱き着こうとするなんて……）」

「（美咲が怒ってない時だったからよかったけど、怒ってる時だったら……）」

「（軽い蹴りじゃあ済まなかったね）」

蹴られた雅樹は蹲っていた。追いついた拓海たちが先ほどの雅樹の行動に呆れている。

「馬鹿だ」

「確かに」

「同情の余地もない」

そうこうしているうちにファミレスの前まで来ていた。

「早く入ろう。さっきの銀行強盗のせいで無駄な時間使っちゃったし」

「そうだね。早いとこ勉強しないとね」

美咲たちはファミレスに入っていった。

拓海たちも雅樹を引き摺りながらファミレスに向かい、入っていた。まさか同じところだとは知らずに。

ボックス席に案内され、美咲はアイスコーヒー、美奈はアイステ

イー、美琴はサイダー、美帆はオレンジジュースを注文して勉強を始めた。4人とも頭脳明晰であるため、わからない教科は特にない。ただ苦手な教科はあり、美奈は数学A、美琴は古文、美帆は化学？。だが、美咲だけは苦手な教科はないのだ。そのため、美咲が教えることになっているのだ。

「美琴、そこは――――だよ」

「なるほどね」

「美帆、これは濃度を求めているから――――だよ」

「そっか」

「美奈、この場合は階乗だよ」

「ほんとだ」

4人が集中し始めたとき、1人の声で中断してしまった。

「あー！ 4人ともここにいたんだ！」

声の主は先ほど美咲が蹴り飛ばした雅樹だった。

第7話 雑談

雅樹が4人のところに向かって行つたので祐輔は仕方なくついて行き、駿はトイレに行き、拓海は案内された席へ歩いて行つた。

「4人ともテスト勉強してるの？」

雅樹の問いに美咲は完全無視状態で美奈たちはどうしようかと悩みながらも勉強する。

「俺たちも一緒にここで勉強していい？」

美咲はまた無視。そのため、美琴が答えた。

「悪いけど他の席でやって」

「なんで!？」

「あんたがうるさいからよ」

美奈と美琴と美帆にとつてはどちらでもいいのだが、長年の付き合いから美咲が嫌がるのがわかつている。だから、美咲の代わりに3人のうち誰かが必ず答えるのだ。

「ええー!!！」

「さっさとどっか行きな」

「勉強の邪魔！」

「あまり騒ぐと追い出すわよ！」

雅樹はガツカリしたようで、肩を落としたため息をついた。そこにすかさず祐輔が雅樹を引きずって拓海が座っている4人から離れて席に向かつて行つた。

「おかえり。随分粘つたみたいだな、こいつ」

「ほんと疲れるよ。ただ、今回は完全に雅樹の敗北だけだね」

「ああ。なんであの子たちは俺に話しかけてくれないの!？」

「さー、知らん」

そこにトイレに行っていた駿が戻ってきた。

「何、話してるんだ？」

「あの子たちはどうして俺に話しかけてきてくれないのかを話していたんだ」

「嫌われてるんじゃないか？」

「なんで!？」

勉強するためにファミレスに寄ったはずが、全く勉強とは無関係なことを話している4人。

「そういえば、さっきの会話でも斎藤さんは一度も口を開いてなかったな」

「そうなんだよ!! 完全にスルーするんだよ、彼女!」

拓海はどうでもいいと思ったので、1人だけ食べ物を注文していた。そのことに3人は気付かず、いつの間にか美咲がなぜ無視するのかを議論していて完全に勉強のことを忘れていた。

勉強を始めて1時間ほど経ち、美咲が手を止め口を開いた。

「今日はここまでにしない？」

「そうだね。それじゃあ、そろそろ帰ろう」

「早く出よう」

美咲たちが帰ろうとしていることに拓海以外気付いていない。

4人がファミレスを出て10分ほどして、黙っていた拓海が口を開いた。

「そろそろ帰ろうぜ」

「そうだな、もうじき18時だし」

「あれ？　そういえばなんでファミレスに居るんだっけ、俺たち」

雅樹の言葉に拓海が溜め息をついた。祐輔と駿はすぐ思い出したが、言い出しつぺの雅樹はまるで思い出せないようだ。

「勉強するために寄ったんだろ」

拓海 of 言葉でようやく思い出した雅樹は大声を出した。

「あ————！！！！　忘れてた————！！！！」

雅樹の大声に店内にいた人たちが一斉に4人の方を見たため、祐輔が頭を一発殴り駿が「すいません」と頭を下げ、すぐに勘定を払い店を出た。そのあと、その場で4人は解散し、それぞれ帰路に着いた。

第8話 初めての会話（前編）

中間テストが終わり、2日が経った日の昼休み、中間テストの結果が出た。青城高校では、各階のラウンジに全学年上位50位までのテストの結果が貼り出される。

「美咲！ 結果が張り出されたよ」

結果を見に行っていた美奈たちが戻ってきた。

「そう。どうだったの？」

「私たち3人は学年3位で美咲は学年1位だったよ」

「私が1位で美奈たち3人が3位ということは2位は誰なの？」

「2位はいないよ」

「同点で1位が2人」

「美咲の他にもう1人1位がいたの」

それを聞いて美咲は真っ先に1人の人物が思い浮かんだ。

「それってうちのクラスの黒田拓海でしょ」

「そうなのよ。しかも3位も私たち3人だけじゃないの」

学年1位が2人、学年3位が5人。しかも、その7人が同じクラスにという、青城高校始まって以来のことが起きたのだった。

ラウンジでテストの結果を見ていた雅樹が項垂れている。1位は拓海と美咲、3位に祐輔と駿、美奈と美琴と美帆で雅樹の順位は20位なのだが、中学の時より順位が下がったのだ。中学の時は学年1位は拓海、2位で祐輔と駿で2人と同順位だったのだ。

「うっっ。あの時、喋っていないで勉強していれば……………」

「忘れて雑談なんかしているのが悪い」

「ってか、なんで祐輔と駿は3位なんだよ！　あの時、俺と一緒に話してたじゃん！」

「さあ、知らん」

拓海たちは不機嫌な雅樹をその場に置いていき、教室に戻った。

美咲たちが話をしながら鞆からお弁当を出していると、同じクラスみらかみゆかの村上里佳が話しかけてきた。

「美帆ちゃん！　美帆ちゃんって中学のときバスケット部で全中で優勝したことがあるんだよね」

「ええ、そうよ」

「今度バスケットのコーチして欲しいんだけど……」

「いいわよ」

「ありがとう！」

「ちょっと待ったー！」

突然の声に美咲たちが声のしたほうを見た。そこにいたのは、……。

第9話 初めての会話（中編）

そこにいたのは、先程までラウンジに掲示されているテスト結果表の前で沈んでいたはずの雅樹だった。

「バスケなら付属中バスケ部エースだった俺に相談してくれよ！」

「なんであんたが出てくるのよ！」

話に割り込んできたことに美琴が突っ込んだ。美琴と雅樹を無視している美咲を除いた他の人たちは呆然としている。

「まあ、細かい事気にするな！」

「……細かくない！！（怒）……」

美咲以外の4人が突っ込むが、雅樹はまたアホなことを言い、それに対してまた突っ込む。そんなやり取りが暫くの間続き、さすがの美咲も我慢の限界が近づき、一発食らわして黙らせようと思い動こうとした、その時。

「雅樹、流石にしつこいぞ」

祐輔と駿が止めに入った。

「どこがだよ！」

「全部……」

さらに拓海も加わり、珍しく拓海が突っ込んだ。拓海が突っ込んだときは、いつも威圧感があり雅樹でさえ黙ってしまう。拓海の言葉のおかげで雅樹が黙ったので美咲は動かずに済んだ。

「それにいくらお前がバスケ部だったからと言ってプレイスタイルやポジションが一緒とは限らないだろ」

「うー……」

拓海言葉に雅樹のテンションが下がり静かになったので、美帆と由佳は話進め始めた。

美咲は自分には関係ない話になったので、弁当を食べる前にトイレへ行った。

「（椎名雅樹、ほんとに五月蠅い男だ）」

少々不機嫌なままトイレから戻ってきた美咲は、目の前の光景に怒りを覚えた。なんと、雅樹が美咲の席に座って机の上に置いておいた弁当を勝手に食べているではないか。そのことに周りはまだ気づいていない。

「（私のお弁当！！！！（怒）」

美咲は机を飛び越えて自分の席に向かった。

「うまい！ この弁当！」

「お前、何食ってんだ？」

祐輔の言葉に振り向いた美奈たちはその光景に大声で叫んだ。

「「「あー！！！！」」」

「ん？ 何？」

「ちよつとあんた！ 何、美咲のお弁当勝手に食べてるのよ！」

他人の弁当を無断で食べているという自覚がないような返答に美琴が文句を言った。

「いや、腹減っちゃって」

「だったら、自分の弁当食べなよ！」

「速弁したから、もうないんだよね」

「なら、食堂行つて食べてきなさいよ！」

「金勿体ないじゃん」

雅樹の言った理由に美奈たちは、頭を悩ませた。

「あんた美咲のお昼どうするのいよ！」

「食堂で食べてもらえば、いいじゃん」

「「「……………あんた、死ぬわよ……………」」」

。美咲の家はこの学校の生徒の中では親の収入が一番少ないと思われる。美咲はお金は必要最低限の金額しか所持してない。さらに、

この学校の食堂は高いため、無駄な出費をしないためにいつも弁当を作って持ってきている。過去に美咲のお弁当を無断で食べた馬鹿がいて、そいつは後で美咲にボッコボコにされていた。だから、その最悪なパターンは避けようと、3人が美咲にどう伝えるか考えようとした。

しかし、時既に遅くもう美奈たちは真後ろに伝説の『鬼神』が現れてしまっていた。

第10話 初めての会話（後編）

美奈たちは背後から発せられている殺気とオーラに体が震え出し、そーつと後ろを向くと『鬼神』となった美咲がいた。

「み、美咲……」

「お、落ち着いて……」

「て、手を出しちゃダメだよ……」

美奈たちは震えが止まらない。しかも3人だけでなく、拓海を除く教室にいる生徒全員が震えている。そしてついに美咲が口を開いた。

「おい、お前！ 何、人の弁当食べてるんだ？（怒）」

「お、お腹がすいたからです……」

「腹が減ったら人の弁当でも無断で食べていいのか？（怒）」

「い、いえ。いけません……」

美咲の殺気に雅樹は敬語になっている。

「だったら、さっさと弁償して私の前から姿を消せ！ でないと、どうなるか……教えようか？（怒）」

「いいいい、いえ、結構です！ すいませんでした！ 直ちに最高級のお弁当を持ってまいります！」

雅樹は猛スピードで教室を飛び出した。5分後、雅樹が弁当を持って戻ってきた。

「お弁当をお持ちしました！ そして、こちらはお詫びのお金です！ それでは失礼します！」

弁当とお金を美咲に渡すと、雅樹は再び教室を出ていった。

美咲の機嫌はまだ悪い。みんな、どうやって怒りを鎮めてもらう考えるが、何一ついい案が出ない。すると、唐突に拓海が自分の財布を出し、何かを取り出して美咲の下に近づいた。

「これ、あげるよ」

拓海が持っていたのは美咲が美咲がよく行くスーパーの商品券1

万円分だった。

「い、いいの？」

「別にいいよ」

「ありがとう」

これで出費が減るため美咲は笑みを浮かべ、先程までの鬼神オーラは収まり、美奈たちや教室内の生徒はホッとした。

「美奈、美琴、美帆。お弁当食べよう」

「そうだね」

「食べよう食べよう」

「どうせなら由佳も一緒に食べない」

「それじゃあ、ご一緒させていただきまーす！」

美咲たちはお弁当を広げ食べ始め、拓海と祐輔と駿は食堂へ向かっていった。

因みに、雅樹が美咲に買ってきたお弁当は、今日の美咲のお弁当の中身と同じものを食堂の人に頼んで高級食材で作ってもらったものだった。

美咲の鬼神オーラから逃げ出した雅樹はというと、屋上で未だに震えていたのだが、このことは誰も知らない。

第1話 挑戦状

美咲が鬼神オーラを放ったあの日以来、毎日のように拓海は美咲のところによくやってくる。そのせいか、祐輔と駿、雅樹もやってくるようになった。最初は少々気にしていた美咲だったが、3日ほどで慣れたようで特に気にしてないようだ。

「そういえば、君たちは部活入ってたっけ？」

雅樹が美咲たち4人に聞くと、美奈が答えた。

「入ってたよ」

「なんで？」

美咲たち4人のことはこの学校の運動部に所属している生徒は全員それなりに知っている。そのため、帰宅部なのが不思議なのだ。

「私たち4人とも高校では部活をやらないうって決めてたから」

「勿体ない！」

「そういうあなたたち4人は部活入ったの？」

今度は美帆が逆に質問した。

「俺と雅樹は中学の時と同じ部活に入ってるけど、拓海と祐輔は入ってない」

2人に理由を尋ねると2人とも面倒だから。と、答えた。

こんなことをいつも話し、時々他のクラスメイトとも雑談していた。だが、雑談していると美咲は視線を感じ、そっちの方を見たが誰も見てなく気のせいかと思った。だが、日に日に視線を感じるこが増え始め、美咲は視線を感じる方をずっと観察し始めた。実は拓海も視線に気付き、美咲と同じことをしていた。

そして、ついに美咲は誰の視線なのかを突き止めた。視線の主は、4月から拓海たちを取り囲んでいた1年から3年までの女子生徒5

0人のものだった。

「（この視線は、もしかして……嫉妬……？）」

美咲が思った通り、その視線は全て美咲たち4人に対する嫉妬なのだ。

美咲が視線の主を突き止めた2日後、ついに彼女たちが動き出した。5人の女子が美咲たちに近づき話しかけてきた。

「上条さん、北村さん、斎藤さん、美島さん。あなた方にお話があります」

「何でしょうか？」

「私たちと勝負して下さい」

「「勝負？」」

この一言で美咲たち4人は大事になるとは知る由もなかった。

第2話 ファンクラブ

彼女たちは4人に勝負を挑んできた。

「なぜ勝負をしないといけないの？」

4人が一番気になることを美奈が尋ねる。すると、返ってきた言葉が衝撃的だった。

「あなた方4人はここ最近、私たちの許可なく“青城の四天王”に近づきすぎているからです！」

「……青城の四天王！？」

「（……青城の四天王……か……。あいつ等のことね）」

初めて聞く言葉に誰のことかわかるはずもなく、考え出す美奈と美琴と美帆。美咲だけ誰のことか想像がついた。

「そうです。大迫駿様、黒田拓海様、椎名雅樹様、高橋祐輔様の4人のことです」

「“私たちの許可”って、あんたたち何なのよ？」

「……私たちは“四天王ファンクラブ”の代表です！！」

「……ファンクラブ……」

この言葉にはさすがの美咲も美奈たちと一緒に眩いてしまった。その後、休み時間が残り5分になるまで長々といろんな事を語られた。

「勝負は明後日の水曜から始めたいと思います」

「始めるって、一体何の勝負よ！？」

「スポーツの勝負です。今週の水曜から土曜の4日間の放課後にやりたいと思います」

四天王ファンクラブは4人に挑んできた勝負は、バレー、バドミ

ントン、バスケ、水泳、柔道、ハンドボール、テニス、野球、サッカーの9種目のスポーツだった。

「当然人数が足りないため、サッカーとハンドボールは3人、バスケは1人、バレーは2人の助っ人をクラス内からのみ認めます」

「では、明後日の放課後、バレーとバドミントンをを行いますので、第3体育館でお待ちします」

そう言ってファンクラブの代表は教室を出ていった。

当然、ファンクラブのメンバーは勝てると思っているため、強気で挑戦状を叩きつけてきた。しかし、勝負する前から既に勝敗がわかっていた者がいた。それは、拓海と祐輔の2人だった。

「この勝負、あたまから結果が見えるよな、拓海」

「ああ。斎藤たちにあいつ等が勝てるわけがない」

「ってか、この学校に斎藤さんたちに勝てる女子自体いないよな。」

ところで、“四天王ファンクラブ”なんてものがあるって知ってたか？

「いや、知らん」

「俺も」

どうやら本人たちもファンクラブの存在を知らなかったようだ。

美咲は溜め息をつかずにはいらなかった。なぜなら、男嫌いの美咲にとって拓海たちは関わりたくないため、どうでもいい話なのに勝手に巻き込まれたのだから。

「どうする？」

「仕方ないな。この勝負、受けて立つ！」

「美咲がそう言うなら、私も」

「売られた喧嘩は買うのが私たちだもんね！」

「そうと決まったら、誰を助っ人にする？」

4人はやる気になり、助っ人を誰にするのか相談し始めるのだった。

第3話 最強の4人VSファンクラブ 第1戦 (1) (前書き)

伝説の区立千歳台中最強の4人が本気に!?

第3話 最強の4人VSファンクラブ 第1戦 (1)

水曜日の放課後。

美咲たちは助っ人にクラスにいた2人の女子バレー部員と一緒に指定された第3体育館へ向かう。

助っ人の2人はバレー部期待の1年部員だ。1人は身長161cmで黒のセミロングで可愛い系のセッター、伊藤^{いと}真帆^{まほ}。もう1人は身長171cmでショートヘアでボーイッシュのウイングスパイカー、森川^{もりかはる}遥^{はるか}。

6人が体育館に着くと、そこには大人数のギャラリーが集まっていた。なんと、ファンクラブ側が新聞部に今回の件を公表して宣伝していたのだ。

「いくらなんでも多過ぎだよな……」

「……うん……」

ギャラリーの数は少なくとも200人は超えているため、呆然としてしまう美咲たち。そこに、美咲たちに気付いたファンクラブの人間が近づいてきた。

「お待ちしておりました。お逃げにならずにお越しいただきありがとうございます」

「ゲームは、1セット。今から15分後に開始したいと思います。よろしいですか？」

「構いません」

話が終わると美咲たちはアップを始めた。

体育館に向かう4人の影。それはファンクラブに“青城の四天王”と呼ばれていた張本人たちだ。

「さっき掲示板にこの勝負のことが掲示されてたぜ」

「随分大事にしてるんだな、あいつ等」

「どっちが勝つか？俺としてはどっちも負けて欲しくないんだけど」

「いい加減にしろよ。その女好きみたいな態度」

「そうそう。こっちまでとばっちりを受けるんだから」

ここでも雅樹の目立ちたがりが出たため、流石に注意する祐輔と駿。

さらに拓海からきつい一言。

「…お前、彼女できないな……」

「……………」

思わず黙ってしまった祐輔と駿。雅樹は「そんな……………」と言って顔を俯けた。どうやらテンションが一気に下がったようだ。そんな雅樹を無視して拓海は歩いていき、そのあとを追っていく祐輔と駿。

4人が体育館に着くと、ちょうどこれから試合が始まるところだった。

15分経ち、ゲームが始まった。

ファンクラブ側もメンバーは3年と2年が3人ずつで6人とも女子バレー部員。そのうち3年2人と2年1人はレギュラーだ。

3年レギュラーの2人の背の高い方（176cm）をA、もう1

人（170cm）をB、2年レギュラー（173cm）をC、残りの3年（168cm）をD、残った2年のうち背の高い方（171cm）をE、最後の1人（166cm）をFと省略。

サービスは相手からで打つのはAだ。美咲たちはBR、BC、BL、FR、FC、FLの順に美琴、美咲、美奈、真帆、美帆、遥Aがジャンプサーブを打ってきた。かなり速い球だが、美奈はいつも簡単にレシーブして真帆の方に飛ばす。それを真帆がBクイクトス（レフト方向）を上げると遥が強烈なスパイクを決め、1 - 0。

サービス権が美咲たちに移り、遥もジャンプサーブを打つ。これをEがレシーブ、FがAクイック、Cがスパイク。しかし、美帆と真帆のブロックが決まり、2 - 0。

再び遥のジャンプサーブ。今度はAがレシーブ、Dがオープントス、そしてAが強烈なバックアタック。美奈と真帆がブロックするが、ブロックしきれず球は後ろに。だが、美咲がこれをレシーブし、真帆がAクイクトス、それを美奈がサイドラインぎりぎりに決める。これで3 - 0。

その後も、美咲たちは相手に1ポイントも与えず、17 - 0。ここでファンクラブ側がタイムアウト。

「彼女たち、強すぎるわ……」

「とても素人とは思えません……」

「このままだと0点負けに……」

「何としても逆転するわよ！」

「……おー！！」「……」

ファンクラブ側はバレー部のプライドにかけても負けられないた

め、気合を入れ直した。

一方、美咲たちは――

「ここまでは順調ね」

「このあと遙ちゃんだけじゃなくて、美咲ちゃんと美琴ちゃんにもバックアタックをお願いするわ！」

「任せて！」

「思いつき決めてあげるわ！」

先程までの攻撃パターンに加え、美咲と美琴のバックアタックを追加すること。

これでさらに攻撃パターンが増えた。

タイムアウトが終わり、ゲームが再開する。

第4話 最強の4人VSファンクラブ 第1戦 (2)

遙のサーブで試合は再開した。Bがレシーブし、ボールはCの方へ。

「(ここは、トスじゃなくスパイク!)」

Cがトスは2段攻撃でCがアタックした。

「ㅋㅋㅋ(しまった!)」

意表を突かれ、美奈たちは動くことができず、決まりそうになった。しかし、間一髪のところでも美咲が拾った。

「ナイス、美咲!」

美咲が繋いだボールを真帆が左側にトスを上げ、それを美琴がエンドラインぎりぎりにバックアタックを決めた。

「ナイス美琴!」

18 - 0

この試合展開にギャラリイは大騒ぎ。

「ファンクラブの方って全員女子バレー部員でしょ」

「そうそう。それに6人の内3人はレギュラーで残りの3人もベンチ入れメンバーなんだって」

「マジかよ!? そんなメンバーでやってるのに負けてるのかよ」

試合前は笑顔だったファンクラブ会長や会員たちだったが、今はその顔に笑みはなく、冷や汗を掻いていて焦りが見える。

「なんで負けてるのよ！ 相手は素人でしょ！」

ギャラリーを集めたファンクラブ側としては、負けるわけにはいかない。負けたら、ただでさえ恥をかくのに、素人相手に女子バレー部レギュラーとベンチ入れメンバーのチームが負けたとすると、と恥だ。しかも、このままだと0点ゲームで負けそうで途轍もないくらい恥をかくことになるのだから。

「今の上条さんのバックアタックは強烈だったな」

「そうだな。しかもあのコースに決められたら何も言えないな」

美琴のバックアタックに思わず感心している祐輔と駿。それを聞きながら雅樹は誰が何本決めたかを数えていた。

「森川さんが5本、伊藤さんが3本、美島さんが4本、北村さんが5本、今の上条さんが1本。斎藤さん以外の5人はスパイクを打ってるね」

「…………そろそろ打ってくるだろ（きつと途轍もなく強烈なバックアタックが炸裂するんだろうから）」

拓海だけがこのあと起こることを予測していた。

今度の遥のジャンプサーブは強烈でAが当てるだけで精一杯で、ボールはそのままネットを越えてきた。

「……………（チャンス！）」

それを美琴がレシーブして真帆の方へ飛ばし、真帆はそのボールを今まであげていたトスよりも高く上げた。そして、そのトスの最高到達地点にボールがきたとき、女子高生とは思えないジャンプをした美咲の手にボールが触れ、美咲はそのまま思いつきり腕を振り

下ろしてエンドラインぎりぎりに強烈なバックアタックを叩き込んだ。

19 - 0

美咲のバックアタックの威力は一般男子の選手の威力と同等かそれ以上だ。その威力に体育館にいる生徒全員が棒立ち状態。

「美咲、また威力上がってない!？」

「少し上がったと思うけど」

「「「やっぱりね」」」

「「ハハハ……」」

その会話に思わず苦笑いする遙と真帆。

第5話 最強の4人VSファンクラブ 第1戦 (3)

あと6点取られたら負け。バレー部レギュラーとベンチ入りメンバーを揃えたチームが1年部員と素人相手に1点も取れずに負けるなんてことになったら、バレー部の恥。

このプレッシャーがファンクラブチームに重く押し掛ける。そのせいで遥のまた強烈なジャンプサーブを正確にレシーブできず、先程と同じように美咲たちにチャンスボールを与えてしまう。

美咲がレシーブして真帆が右にトス、それを美帆が打つ。と、見せ掛けてスルーし、いつの間にか右に移動していた美琴が再びバツクアタックで右コーナーへ。意表を突かれたファンクラブチームは反応できず。

20 - 0

『あと5点とられたら、“負け”』
その現実が重く押し掛ける。

遥のジャンプサーブは打つ回数を増すごとに速く鋭く強烈になっていく。そのため、相手は当てるので精一杯になってきている。そのおかげでまたチャンスボールで返ってくる。美奈がレシーブして真帆が再び高いトス、そしてハイジャンプした美咲のバツクアタック。相手は触れるどころか、反応することさえできないほど速く強烈だった。たまたまギャラリーの1人が体育準備室からスピードガ

ンを持ってきたいて全員のスパイクの速度を計っていた。

サーブはAが95 km/h、遥が90〜106 km/h。

スパイクがAが140 km/h、Bが136 km/h、Cが137 km/h、Dが128 km/h、Eが120 km/h、F126 km/hで遥が140 km/h、真帆が120 km/h、美帆が140 km/h、美琴が140 km/h、美奈が140 km/h、そして美咲が156 km/h。

美咲のスパイクの速さは一般男子選手並みの速度だ。さらに美咲の最高到達点は340 cmと異常な高さだった。

「……は、速っ!!」

ギャラリ―は美咲のスパイクの速さに大騒ぎ。その速度はファンクラブ側の耳にも入った。

「ひゃ、156 km/h!! そ、そんなに速いの……………」

「い、いくら何でも速すぎますわ……………」

その後も遥のサーブで陣形を崩し、美咲と美琴のバックアタックで決める攻撃で4点取り、いよいよマッチポイント。

「ま、まずいわ! 次、取られたら負けだわ!」

「何としても1点は取らないと女子バレー部の名が泣いてしまうわ」

「女子バレー部のプライドに掛けても0点ゲームにはさせないわ!」

遥のジャンプサーブをEがしっかりレシーブ。レシーブしたボールをDがトス、そしてAが思いっきり右手を振り下ろしてバックアタックを放つ。美奈と美帆がブロックするが、しきれず美琴がレシーブ真帆が高いトス。美咲たちを除く体育館にいた生徒全員が美咲

のバックアタックが来ると予想した。

予想通り美咲が飛んでいて、ボールのところで右腕を振り下ろした。

第6話 最強の4人VSファンクラブ 第1戦（4）

しかし、美咲の右手はボールに触れず美咲は引っ込めた。

（えっ？）

誰もが驚き心の中でそう呟いた。

すると、美咲の横から1人の人影が現れた。みんな美咲のバックアタックがあまりにも印象が強すぎたため、高いトスが上がった時点で美咲が打つてくると思い込んでしまい、その横でもう1人が助走してくることに気がつかなかったのだ。トスの高さを冷静に判断できていれば、真帆が美咲に対して上げていたトスより低く美咲が打つとは限らないことがわかるはずだった。

美咲の横に現れたのは、この試合25本連続でサーブを打ち続けていた遥だった。相手は完全に意表を突かれ動くことができず、遥は簡単に決めた。

「25 - 0で1年1組チームの勝ち」

美咲たち6人はハイタッチをしながら喜んだ。

「ヤッター！」

「これでまずは1勝！」

「作戦大成功！」

「美咲の言ってたとおりだったね！」

実は後半の攻撃パターンは美咲の考えた作戦だった。前半は美咲と美琴は攻撃に参加せずレシーブに集中して美奈と美帆と遥と真帆の4人で攻撃し続け、相手側を追い込んで向こうが気合を入れ直したところに美琴のバックアタックで再び崩し、さらに美咲の女子高生離れしたバックアタックで戦意喪失。そして、最後に美咲と遥の

2人時間差攻撃で止めを刺す。この作戦が一番効果的だと美咲は考えたのだ。

「次はバドミントンね！」

「次も勝つわよ！」

「「「おー！」」」

第7話 最強の4人VSファンクラブ 第2戦 (1)

ファンクラブの生徒たちは沈んでいた。

「まさか、あなたが負けるだなんて……」

「我が校の女子バレー部員がバレーボールで素人相手負けるだなんて……」

「すいません……」

「バレーボールは負けてしまいましたか……」

「仕方ないわ。彼女たちのバレーボールのレベルが高過ぎたから」

ファンクラブ会長の高嶋愛花と副会長の下川陽菜は戦況を冷静に

判断していた。今回の騒動（9番勝負）はファンクラブ会員の7割の希望により高嶋と下川は許可を出したのだが、今の2人は微妙な表情をしている。

「でも、まだ勝負は始まったばかりよ」

「確かにそうですが、私には他の種目も彼女たちに勝てるとは思えないのです」

「流石に全て負けるなんてことはないでしょ。こちらは全種目ともその種目の部活に所属している生徒なんだから」

「だいいのですが……。ところで、なぜ彼女たちと勝負するのでしょうか？」

「よくわかんないけど、嫉妬じゃないの？」

今回の騒動の原因をよく知らないトップの2人。そもそもこのファンクラブは“青城の四天王”のファンクラブではなく、イケメンを鑑賞するクラブだったのだ。それがいつの間にか“四天王ファンクラブ”になってしまった。そのため2人はあまり関わらなくなり、ファンクラブの活動が曖昧になってしまい、このようなことに

なつたのだ。

「私、会長を他の方に譲ってフアンクラブを辞めようと考えているのですが」

「いいんじゃないの？ 愛花の自由だし。そうしたら私も辞めるし」
フアンクラブの会員は会長と副会長がまさかこんな話をしているとは知る由もなかった。

「切り替えて、次のバドミントンは勝つわよ！」

「10分後、試合開始だからね！」

「わかった」

「わかりました」

「女子バドミントン部のプライドにかけても負けられないわ！」

女子バドミントン部の4人は気合十分でアップを始めた。

バドミントンはシングルスで4人同時に行う。そのため美咲たちもすぐに軽くアップを始める。しかし、そのアップがとても軽くには見えないレベルだった。

「ねえ、美奈」

パンッ パンッ パンッ

「何、美咲？」

パンッ パンッ パンッ

「明日、体育あったよね」

パンッ パンッ パンッ

「たしかあったよ」

パンッ パンッ パンッ

「陸上だよね」

パンッ パンッ パンッ

「そうそう、ハードルだったけ？」

パンッ パンッ パンッ

「違うわよ、美奈。走り幅跳びよ」

パンッ パンッ パンッ

「そうだったけ？」

パンッ パンッ パンッ

「幅跳びといえはやっぱり美咲と美琴よね」

パンッ パンッ パンッ

「そうそう」

美咲は美奈に向かってシャトルを打ち、美奈は美帆に向かって打ち、美帆は美琴に向かって打ち、美琴は美咲に向かって打つやり方で高速ラリーする4人。しかもシャトル2つ使っている。この動きにギャラリーは思わず口を開け、呆然と見ている。

（（な、何なんだ、この4人！？））

「10分経ったので試合を始めます。それぞれコートに入って下さい！」

第2戦が始まった。

第8話 最強の4人VSファンクラブ 第2戦 (2)

4コート同時に始まった。どのコートもファンクラブチームのサービスからだ。

美帆の相手は女子バドミントン部2年の清水。団体戦のメンバーでかなり強い。

清水のバックハンドのショートサービスで始まり、美帆はバックのサイドハンドで右にウィップを放つ。清水がバックのサイドハンドで右にドライブ。それを美帆は右にプッシュし、清水は拾って左にロブを上げたが、美帆が強烈なスマッシュで決めてきた。

1 - 0

今度は美帆のサービスからで美帆もショートサービスを放ち、清水がドライブで返すと美帆もドライブを打つ。2、3回ラリーをして美帆がまたプッシュで仕掛けた。清水は今度はヘアピンで打ち返した。それを美帆は清水のいない左にロブを上げる。清水はスマッシュをストレートに放つ。

パンッパンッ

だが、美帆は難なくロブで返す。清水はクロスにスマッシュを打つがまた返され、今度はスマッシュではなくハイクリアーをで美帆の後ろへ。美帆は下がってジャンプしてスマッシュ。

パンッシューン

スマッシュの速度が速すぎて清水は当てることができず棒立ち状

態。その後も美帆が主導権を握ったまま、清水は1点も取れずに試合は終わってしまった。美帆だけでなく、美琴も美奈も美咲も最初から最後まで指導権を握って試合が進んで行き、みんなストレート勝ちで試合を終わらせた。しかも、美咲は利き腕の右ではなく左で試合をしていたのだった。

「短かったね」

「ほんと。もう少しかかるかと思ってた」

「でも、おかげで早く帰れるわね」

「そうだな、早く着替えよう」

体育の授業が終わった後のような会話をする4人。そこへファンクラブ代表が近づいてきた。

「本日はこちらの完敗です。ですが、明日は勝たせていただきます」
「こちらこそ受けて立ちます」

「では、明日は水泳と野球とバスケットを行います。あと、サッカーの助っ人の人数ですが、3人から7人に変更します」
「わかりました」

こうして初日の勝負は終わった。

第9話 買い物

制服に着替え終わった4人はいつも通り帰路につく。

「明日は野球、水泳、バスケの順になったけど。これって公平なのかしら？」

「公平なんじゃない。水泳って結構、体力消耗するけど短時間で終わるし」

「そうだね。野球は美咲が得意だし」
「普通だけど」

「「「いやいやいや。普通じゃないから」」」

作戦を練ってるわけではなく、雑談をしながら電車に乗る。普通ならバスケの作戦を立ててもおかしくないのだが、小学生の時から区のバスケ大会に出場していて全勝していたため作戦は何通りもあるが、全ての作戦に名前があり名前ですぐに動けるため余裕なのだ。
「美咲、このあと練習する？」

「ごめん。今日は買い物に行かないといけないから」

「そっか。それじゃあ仕方ないか」

「練習しなくてもアップの時に確認すれば大丈夫でしょ」

「そうそう。私はバスケなら問題なしよ！」

余裕の笑みを浮かべながら答える美琴と美帆。その2人に美咲は「でも、油断しちゃダメだからね」と言うが、3人のことを信頼しているため油断しないことはわかっている。それは3人も同じだから笑顔で頷いた。

駅で美奈たちと別れた美咲は行き付けのスーパーに向かった。美咲は大体、日水土の週3回スーパーに行く。母の美幸は忙しく帰宅が遅く、美鈴と美月と美春は部活があるため美咲が行くしかないの

だ。美咲が部活に入らなかった理由の1つがこれだ。

美咲は肉と魚と野菜と冷凍食品、そして10kgの米2袋購入。女子高生が1人でこれだけの量を買っていくのを見ると普通は驚くが、美咲は常連のため美咲の行く時間に来ている人やスーパーの店員は慣れている。

美咲が買ったものを袋に入れてみると、美咲の横で袋に入っていた女性が「あら、美咲ちゃん」と、声をかけてきた。美咲の住んでいる部屋の隣に住んでいる美幸の親友の橋本真由美だ。彼女も買い物に来ていたようだ。

「こんにちは、真由美さん」

「今日も大量に買ったわね」

「そうなんですよ。美鈴たちの食べる量が増えたので、お米のなくなるのが早くて安い時に買つとかないと大変なんですよ」

「そつかー、大変だね。だけどそれだけの荷物を持って帰るの大変じゃない？ 今日自転車？」

美咲の買った量は尋常じゃない。まず米10kgを2つ、スーパーで貰える一番大きいサイズの袋4つの計6袋だ。

「いえ、今日は歩きです。大変ですけどなんとか運んで帰れますよ」
そう言つて全ての袋を両手で持つ美咲。成人男性でも持つのが大変な量を女子高生である美咲は平気で持つ。しかし自宅マンションまでは2kmあるため、いくら美咲でも大変だ。

「いくらなんでも歩いて帰るの無茶よ。私、今日は車だから乗つていつて！」

「いいんですか？」

「いいわよ！」

「いつもすいません。気を遣わせてしまつて」

「そんなこと気にしないでいいわよ。美幸の娘なんだから！」

美咲と真由美は駐車場に向かった。2人は車に乗るとスーパーを後にした。

第10話 斎藤家の普段の平日

マンションに着き駐車場に止めると、美咲は真由美の車から降り自分の袋を持つ。

「ありがとうございます！」

「どういたしまして」

美咲と真由美はエレベーターに乗り、6Fへ。美咲の部屋は607号室で真由美は606号室だ。

真由美は夫と男児1人女児1人の4人家族で長男の由伸は中学1年生で学校は区立千歳台中学校、長女の真央は小学校5年生だ。

「そういえば由伸君は野球部に入ってたんですね？」

「そうそう。毎日へとへとになって帰ってくるわよ」

由伸は内野手でそれなりに上手い。しかし千歳台中学の野球部は都大会の常連校のため、選手はかなり上手い。

「やっぱり野球部は大変なんですね」

「美咲ちゃんの方が大変だったじゃない。柔道部と空手部の主将を務め掛け持ちしてた上に国際試合にも出場してたんだから。それに比べたら由伸なんか大したことないわよ。1年だからスタメンどころかベンチ入りすら出来てないんだから」

「私のは、ただの我儘ですよ」

美咲がそう答えるのと同時にエレベーターは6階に到着。2人はエレベーターを降り部屋へ向かう。

「それじゃあ美咲ちゃん。またね！」

「はい！ 今日もありがとうございました！」

部屋に入ると美咲は食料品を冷蔵庫に入れ、それが終わると自室に行き普段着に着替える。着替え終わると洗濯物を取り込み、時計を見る。時計の時刻は17:47と表示されていたので夕食の用意

を始める。

「（昨日は鯖の塩焼きだったから、今日はとんかつにしよう!）」
冷凍庫から豚肉のロースを取り出し自然解凍させ、その間にお米を研ぐ。研ぎ終わると美鈴たちが帰ってくる19時に炊飯器をセツトし、野菜を切る。そして、味噌汁を作りながらとんかつに取りかかった。

豚肉に片栗粉と卵とパン粉をつけ、油で揚げる。衣の色が綺麗な色になると素早く油から上げ、それぞれの皿に乗せ、盛り付ける。

ガチャン キー

「……ただいま!」

美鈴と美月と美春が帰ってきた。美咲は「おかえり」と言うと味噌汁とちょうど炊けたご飯をよそう。

美鈴たちが着替えてくると美咲は3人に皿や茶碗を運ばせる。

「……いただきます!」

いつも4人、美幸が居る時は5人一緒に食べる。

食事のときは黙って食べるのではなく、今日の出来事などを話す。そうやって家族の仲を深めるのだ。

「あ、お姉ちゃん。私、明日は部活休みになったよ」

「それじゃあ、帰ったら掃除しておいてくれる?」

「いいよ!」

「お願いね、美鈴」

「美咲お姉ちゃん!」

「何?」

「今週の土曜日の部活、午前中だけになったよ!」

「わかったわ!」

美咲はいつも食事の後に3人の予定をカレンダーに記入するのだ。

美咲たちが食べていると玄関から、

ガチャン キー

「ただいま！」

美幸が帰ってきたのだ。

「……お帰りなさい！」「……」

美咲は席を立ち、キッチンへ向かう。美幸はリビングを通り、隣の自分の部屋へ着替えに行く。美咲は美幸の分の肉を揚げ始める。美鈴たちも席を立ち、美鈴は味噌汁をよそい、美月は野菜を皿に盛り付け、美春はご飯をよそい運ぶ。肉が揚げ終わったとき、美幸が部屋から出てきた。

「今日はとんかつなのね」

「そつだよ！」

答えながらカツを皿に乗せ、運ぶ。美幸は自分の椅子に座ると「いただきます！」と、言って食べ始めた。

食べ終わると美幸と美鈴が皿洗いと片付け、美月と美春が風呂掃除をする。美咲は食事の時に言っていた予定をカレンダーに記入。そのあと、みんなでテレビを見て、21時半頃から美鈴、美春、美月、美咲、美幸の順に風呂に入る。風呂から出たあとはそれぞれ部屋で勉強、美幸は仕事をする。

23時半頃、みんな就寝。

第11話 最強の4人VSファンクラブ 第3戦 (1)

翌日の昼休み

中休みに野球は昼休みに行うと言われたため、美咲たちは3限目の授業が終わると早弁をしていた。昼休みになると、自分のグローブを持って野球・ソフトボール専用である第2グラウンドに向かった。

グラウンドに着くと美咲と美奈、美琴と美帆でキャッチボールを始めた。

「野球の勝負ってどんなのかしら？」

「あれじゃない？ お互いに何球か投げて何本打ったっていうやつ
「そうだね」

「私はなんでもいいけど」

対決のやり方が気になっている美奈と美琴と美帆に対して美咲は
なんとも面倒くさそうに言っている。

「ところで美咲？」

「何？」

「今日はどっちで投打するの？」

4人とも右利きで美奈と美琴と美帆は右投げ右打ちなのだが、美
咲だけは両投げ両打ち。しかも両方とも男子並み。

「まだ決めてない。だから両方の肩作ってるんだよね」

キャッチボールを始めて10分。一人また一人とギャラリーが増え始め、その中に拓海、祐輔、駿、雅樹の4人もいた。

「野球対決、俺も参加したいな」

「だったら野球部に入部しろ」

「この勝負には関係ないと思うけど……」

「俺はバスケがやりたい……」

そこに同じクラスで野球部所属の工藤啓一くどうけいちと津山翔つやまじょうと若松翔太わかまつしょうたもやってきた。

「この勝負、祐輔たちはどっちが勝つと思う？」

「俺たち2人は向こう（ファンクラブ）が勝つと予想で、翔太だけはこっち（美咲たち）が勝つと予想している」

「俺らは斎藤さんたちが勝つと思っている」

「それじゃあ勝つ方に1000円賭けようぜ！」

「……賛成！」「……」

拓海たち後ろから声が聞こえ振り返ると、そこには1・2生徒全員だった。これによって1・2の賭けが始まった。その結果、美咲たちには14人、ファンクラブには24人、となった。

キャッチボールで肩を温めていると、ファンクラブの代表者が来た。

「ゲーム開始は10分後。対戦方法は1人10球勝負でお互い投打します。対戦相手はくじを引いて決めます。キャッチャーはギャラリーの中から1人選んでおいくださいよろしいですか？」

「構いません」

「それでは、10分後」

向こうの代表者が去っていくと美咲たち4人は同時にギャラリーの一点に視線を向けた。

「キャッチャーを頼むのは、やっぱりあいつしかいないわね」

「野球部1年生キャッチャーの若松君」

「奴で決まりね」

美奈が若松を説得しに向かい、なんとか引き受けてもらった。

第12話 最強の4人VSファンクラブ 第3戦 (2)

10分後

「それではこのクジを引いてください。同じ数字の人と勝負します」

クジの結果、美咲が4、美奈が1、美琴が3、美帆が2。ファンクラブ側は4人とも女子野球の選手で日本代表にも選ばれている。クジの結果は1から順に麻生、馬原、千葉、伊達となった。

麻生は身長174cmの右投げ右打ち、馬原は身長168cmの右投げ左打ち、千葉は身長164cmの右投げ両打ち、伊達は身長170cmの左投げ左打ち。

対戦相手を確認すると、じゃんけんをして先攻の順を決め、美咲たちが先攻に決まった。

「それでは1から順に始めます!」

美奈はバットを持って右バッターボックスに入り、麻生はグラブを持ってマウンドへ登る。審判は野球部キャプテンが務める。

「プレーボール!」

麻生は両手を大きく振りかぶる。どうやらワインドアップで投げるようだ。リラックスした状態で投げた。球種はストレートだ。

美奈はまるでバッティングセンターで打つかのようにバットを振る。

カキーン ガチャン

ボールはバットにジャストミートして打球はレフトのフェンス上部に直撃。その飛距離は十分ホームランの飛距離だ。

「（えっ！？）」

麻生は打たれるとは思ってもしなかった。麻生の投げた球の球速は147km/hで女子高校生に投げるたまにしては十分速く、Aの自己最速だった。

麻生は気を取り直し次に決め球のスライダーを投げるも、今度はライトのフェンスに直撃してまたホームラン。

そのあとも麻生は果敢に投げるも簡単にホームランされ、完敗。

攻守交代して美奈がマウンド、麻生がバッターボックス。
美奈もウィンドアップでストレートを投げた。麻生はスイングするも空振りでゲーム終了。

球速が147km/hだった。

「嘘……麻生さん負けるなんて……」

「ま、まだよ。あとの3人が勝てばいいのよ！」

2番目の美帆VS馬原。

馬原はノーウィンドアップで投げる。

しかし、

カキーン ガチャン

打球は美奈と同じで全てフェンス直撃のホームラン。

攻守を交代して美帆が148km/hのストレートを投げる。馬原も当てることができず、敗北。

3番目の美琴VS千葉でも全く同じで147km/hのストレートを千葉が空振り、千葉の敗北。

そして、ラストの美咲VS伊達。

美咲は左バッターボックスに入り、伊達が投げた球全てを流し打ちのホームランにした。

攻守交代で美咲は左投げ用のグラブをしてマウンドへ。

「(打ってやるわ！ 私は打撃も得意なのよ！)」

伊達はバッターボックスに入ると一気に集中する。

「(球種はおそらくストレート)」

球種を絞り込んで美咲が投げるのを待つ。

一方、美咲は――。

「(彼女はストレートだと思っているだろうから、ここは“アレ”にしよう！)」

美咲は伊達の裏をかいてストレート以外の球種を投げることにした。

美咲がウィンドアップから思いつきり投げた。伊達はストレートだと思い、スイングする。「捕らえた！」と、伊達が思ったときだ

った。ボールの軌道はストレートと同じだったが、ホームベースから1mほど手前でボールが落ち出した。

「（変化球！？）」

そのため、ボールはバットに掠ることなくミットに収まり、伊達
は空振り。美咲はストレートではなく、フォークを投げたのだった。

これで伊達の敗北が決まり、4勝0敗で美咲たちの勝ちとなった。

第13話 最強の4人VSファンクラブ 第4戦 (1)

「賭けは俺たちの勝ちだな」

「くっそー。あいつ等強すぎだろ!!」

悔しがる工藤たちは14人に1000円ずつ払う。

そんな賭けが行われていたとは知らない美咲たちはすぐ更衣室に行って着替え、教室に戻った。

放課後――。

今日は5限で終わりのため、余裕をもって4戦目、5戦目を行うことができる。4戦目は水泳のため、水着を持って指定された第二屋内プール(50mプール)の更衣室に向かう美咲たち。

「水泳勝負ってことは、やっぱりリレーだよねえ」

「そうだろうね」

「問題は何のリレーなのか……」

「そうね。自由形かメドレーリレーのどちらかでしょうね」

「メドレーリレーだったら、どうする？」

「そしたら、美奈が背泳ぎ、美帆がバタフライ、美琴が平泳ぎ、私が自由形の方がいいんじゃない？」

美咲はどの泳法も速いため、どれでも良い。そうになると、3人中でそれぞれ自己タイムが良い泳法を選ぶと、美奈は背泳ぎが美咲

の次に速く、美琴は平泳ぎが美咲の次に速く、美帆はバタフライが美咲の次に速いため、美咲が自由形を選択する方が良いと美咲は考えたのだ。

「確かにその方が良いかもしれないわね！」

「異議なし！」

「それじゃあ、自由形のレリーの順番はどうする？」

「じゃんけんで決める？」

「」「賛成！！」「」

じゃんけんの結果、美琴、美奈、美帆、美咲の順になった。

先に第二屋内プールに着いた美咲たちは、更衣室で水着に着替え、プールサイドでアップを始めた。アップが終わった頃にフアンクラブの生徒たちがやって来た。

「対戦方法は、個人メドレーのレレーです」

「個人メドレーのレレー？」

「はい。200m個人メドレーを4人がリレー方式で継いで泳ぎます」

「つまり、第1泳者が個人メドレーで自由形まで泳ぎ終わったら、第2泳者が個人メドレーで自由形まで泳ぎ、第3、第4泳者も同じように個人メドレーを泳ぐってことですね」

「はい。このルールで構いませんか？」

「構いません」

「では、こちらのアップが終わり次第始めたいと思います」

代表が去っていくと、美咲たちは順番をどうするか話合った。その結果、自由形リレーの順番になった。

ファンクラブ側のアップが済み、スタート台に第1泳者の美琴が上がる。

「それでは始めます……。用意…ピーッ！」

第14話 最強の4人VSファンクラブ 第4戦 (2)

バsshャーン

美琴とファンクラブ側の第1泳者、Aがほぼ同時に飛び込んだ。まず最初のバタフライは、美琴の方が少しリードしているがほぼ互角の泳ぎで折り返し背泳ぎへ移行。バサロで少し差が出て、美琴が頭一つリードした状態で折り返して平泳ぎに変わる。

「どうやらこのまま美琴が抜かれずに美奈に繋ぎそうね」

「そうだねっ」

得意の平泳ぎに変わった美琴はペースが上がり、Aをどんどん放していき、美琴が折り返すときにはAとの差が体一つ分以上になっていた。

クロールになると差は変わらないまま美琴が先に泳ぎ終わり、タッチ。美奈が飛び込み、水中をドルフィンキックで15mまで泳ぐ。美奈が飛び込んでから遅れてAが泳ぎ終わり、タッチしてBが飛び込む。

「（ここは得意のバタフライで一気に差を縮めて最後の自由形で逆転してやる）」

この時点で美琴がリードした体一つ分差があるため、Bは縮めようと始めから飛ばす。

しかし、この方法が裏目に出るとは、Bはまだ知らない。

Bが追い上げて美奈との差が体半分に縮まり折り返す。バサロで泳いで15m近くで水面にBが上昇すると、美奈との差が体二つ分も開いていたのだ。

美奈は背泳ぎが4泳法の中で一番得意で中学1年の時のタイムがすでに高校生の全国トップクラスのタイムだった（美咲はそれ以上のタイムだった）。その中でもバサロ泳法が得意でバサロだけなら美咲とほぼ同じタイムで泳げる。しかもクロールも得意なため、Bは作戦は崩れたのだ。

「（バタフライで飛ばしすぎたわ！　ここでまた飛ばすとクロールにまでスタミナが回らなくなるわ）」

Bは飛ばすことができず、美奈がどんどん突き放していく。美奈が折り返したときには体三つ分以上離れていた。美奈はこのリードを保ったまま平泳ぎとクロールを泳ぎ、第3泳者の美帆へ。

飛び込んだ美帆は得意のバタフライでさらに差を開く。Bが泳ぎ終わってCが飛び込んだ時、差は既に半分近く広げていた。美帆はペースを落とすことなく折り返して背泳ぎに。Cはなんとかこれ以上差が開かないよう全力で泳ぐが、差は開くばかり。背泳ぎで少し縮めたものの、平泳ぎでは変化なくクロールでさらに差が開いた。

美帆が泳ぎ終わり、アンカーの美咲が飛び込む。ドルフィンで15mほど進んで水面に上昇すると、途轍もない速さで泳ぎ、Dが飛び込んだのは美咲が折り返してバサロが終わって水面に上昇してきた時だった。

中学3年の時、美琴は平泳ぎ、美奈が背泳ぎ、美帆がバタフライのタイムがオリンピック選手並みのタイムで美咲は4泳法全てが世界記録より速かったのだ。つまり、勝負する前からこの結果は出ていたのだ。

結局、勝負の結果は美咲が泳ぎ終わったとき、Dは平泳ぎで20mを過ぎた辺り泳いでいたという圧倒的泳ぎで美咲たちの勝利だった。

「……………は、速すぎ……………」

この声が聞こえて始めて美奈たち3人はギャラリーに気付いた。

「あれギャラリーがいたんだ」

「余りにも静かで気がつかなかったわ」

「私も」

「盗撮はされてないから大丈夫よ」

美咲のこの言葉に3人は、「さすが美咲。こんな時でも気配を察知するなんて……………」と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6352w/>

最強美少女と最強男子

2011年12月24日02時55分発行